古文単語 現代語訳の誤りを直す ②

高校／訳のどこが、なぜ違うかを見つけて直す

名前 _____

日付 _____

訳には、古語の意味の取り違えが1か所あります（誤りが無い訳も1つあります）。
訳から書き抜いて「誤りの語句」の欄に、正しい訳を「正しい訳」の欄に書く。
誤りが無ければ「誤りの語句」と「原因」の欄に「なし」と書く（「正しい訳」は空ける）。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ

1 原文　冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。（枕草子・第一段）
訳　冬は努力するのがよい。雪が降っているのは言うまでもない。

誤りの語句	正しい訳	原因

2 原文　やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。（徒然草・第三十二段）
訳　まもなく掛け金をかけて奥にこもってしまったならば、残念だっただろう。

誤りの語句	正しい訳	原因

3 原文　はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。（源氏物語・桐壺）
訳　はじめから自分こそはと自負していらっしゃった方々は、この方をすばらしい者としてさげすみ、ねたみなさる。

誤りの語句	正しい訳	原因

4 原文　「我こそ死なめ。」とて、泣きののしることいと堪へがたげなり。（竹取物語）
訳　「私のほうこそ死んでしまおう」と言って、泣いて悪口を言う様子は、とても耐えがたそうである。

誤りの語句	正しい訳	原因

5 原文　つれづれなるままに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを（徒然草・序段）
訳　することがなく退屈なのにまかせて、一日中硯に向かって、心に浮かんでは消えてゆくとりとめもないことを

誤りの語句	正しい訳	原因

6 原文　いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。（源氏物語・桐壺）
訳　どの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんお仕えしていらっしゃった中に、それほど高貴な身分ではない方で、際立って胸をときめかせていらっしゃる方がいた。

誤りの語句	正しい訳	原因

7 原文　花紅葉のおもひも皆忘れて、悲しくいみじく思ひなげかるれど、いかがはせむ。（更級日記）
訳　花や紅葉を楽しむ思いもすっかり忘れて、悲しくすばらしく嘆くけれど、どうしようもない。

誤りの語句	正しい訳	原因

8 原文　ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。（枕草子・第一段）
訳　ただ一つ二つなどと、かすかに光って飛んでいくのもこっけいだ。

誤りの語句	正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます